

「心と思いを一つにして」

使徒言行録 四章三二―三七節

南山教会 二〇二五年七月一三日

村山盛芳

礼拝堂にお集まりくださった皆さま、おはようございます。シルバーホーム「まきば」、名古屋東教会をはじめとしてYouTubeで礼拝にご参加いただいている皆さま、おはようございます。今日も一緒に、みことばに聴きましょう。

今日の聖書箇所には、初期の教会の新しい教会生活の始まりの様子が記されています。「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。」(三二節)。決して、私有財産を持つことが禁じられていたわけではありません。献げる人は自発的に、自由な意思によつて献げていたのです。「一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく」とあります。表現を変えれば、すべてのものは神から与えられたものであり、自分自身の力で獲得したものではないということです。教会の人たちはこの信仰に生きるのです。

このような教会生活が始まっていました。そして、このように続いていきます。「使徒たちは、大いなる力をもつて主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。」(三三節)。使徒たちは言葉でイエス・キリストの復活を宣べ伝えていましたが、言葉だけではありませんでした。イエス・キリストの復活とは、新しい命に生きることです。新しい生活です。教会に来てみれば、本当に新しい命に生きている人たちがいる。新し

い生活が始まっていることが分かる。それが教会という場所です。

続けて、このように記されています。「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。」（三四―三五節）。「一人も貧しい人がいなかった」と記されています。使徒言行録には、教会が生まれて発展していったことが記されていますが、エルサレム教会が最初の教会です。その後、アンテオキア教会が生まれました。それから、パウロの伝道旅行によって、次々と教会が生まれていきます。そのようにしてたくさん教会ができるわけですが、地域によって、経済的に比較的恵まれている教会と、そうではない教会に分かれることになります。エルサレム教会は経済的にはどちらかというと恵まれていない教会です。逆に、コリント教会などは恵まれている教会です。新約聖書のコリントの信徒への手紙二には、コリント教会からエルサレム教会へきちんと献金を送るように、手紙を書いたパウロは力説しています。

なぜパウロはそんなことを書いているのか。エルサレム教会はユダヤ人が中心でした。コリント教会はギリシア人が中心でした。ユダヤ人とギリシア人が同じ教会で一緒にやっていることは、かなりの困難が伴うことでした。実際に使徒言行録の中でも、ユダヤ人・ギリシア人問題で対立も生じています。そんな両者が、イエス・キリストを信じる信仰によって一つになってやっていく。教会は紆余曲折がありながら、それを見事にやってのけました。コリント教会からエルサレム教会への献金もその一つの現れです。ギリシア人のコリント教会の人たちがユダヤ人のエルサレム教会を助けたのです。

そういう事情からも考えて、エルサレム教会は貧しい人たちが多かったのだと思います。

全員が土地や家売って代金を持ち寄ることができたわけではありません。比較的经济力のある人たちが、代金を持ち寄り、使徒の足元に置いた。そしてそれを分かち合った。そのようにして貧しい人がいなくなつたのです。「足元に置く」というのは、管理を委ねるという意味があるのだそうです。

なぜ教会はこのような歩みをすることができたのでしょうか。繰り返し申し上げますが、教会の人たちは強いられたわけではありません。自発的に動いたのです。なぜそのように動くことができたのか。何によつて動かされたのか。そこに愛があつたからです。神を愛すること、隣人を自分のように愛すること、数多くの戒めが旧約聖書には書かれていますが、これらを要約して「愛である」とイエス・キリストは言われました。愛がすべての源になる。その愛があれば、自然にそうなってくる。使徒言行録の今日の聖書箇所は、見事にそれを体現していると思います。何かの強制力で人が強いられて動いていくのではない。愛で人が動いていく。しかも自然に動いていく。キリストは愛で人を動かすのです。

私たちも、教会で礼拝を献げ、祈り、働き、教会生活をしています。その原動力は愛です。この世ではそうではありません。愛ではなく、お金で人は動いたり、権力によつて動かされたり、義理によつて動いたり、社会的な習慣から動いたり、人の目を気にして動いたり、その動き方は不自由なところがあります。しかし教会はそうではありません。愛によつて私たちは動かされるのです。

今日の箇所の最後のところにこうあります。「たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。」（三六―三七）。

バルナバという人物がここに紹介されています。土地や家を売った人たちの中の一人です。ヨセフというのが本当の名前です。バルナバというのはあだ名です。「バル」というのが「子」、「ナバ」というのが「慰め」という意味です。本当にその名を体現しているような人だったのでしょう。次の箇所に出てくるのは、アナニアとサフィラという夫婦です。明らかに今日のバルナバと来週のアナニアとサフィラは対比されて描かれています。良い例と悪い例が並べられているとも言えるかもしれません。

教会は最初からまったく問題がなかったわけではありません。むしろ私たち人間は皆、罪人です。教会は罪人の集まりですから、当然、教会にも躓きがあります。多くの問題が生じていきます。使徒言行録にもはつきりそのような問題が取り上げられています。

しかしそこで私たちは諦めない。教会に失望しない。人間は罪人かもしれませんが、人間からは救いは生まれてこない。けれども、だからと言って私たちは教会に背を向けて立ち去ったり、人間に失望する必要ありません。なぜなら、キリストの愛が教会にはあるからです。私たちを動かす愛の力がある。躓くことがあったとしても、なおここで教会生活をしていくのです。

キリスト者の生活が始まっています。イエス・キリストと一つに結ばれた新しい命があり、新しい生活がある。私たちはキリストの愛に根差した歩みをなしているのです。